

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	人間発達環境学研究科
-----	------------	----------	------------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例3 大学院教育改革プログラム(大学院 GP)「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

院生、教員各 13 名、計 26 名よりなる「ヒューマンコミュニティ創成委員会」を組織し (H19)、多数の院生参画のもと学術支援活動・実践活動・大学運営活動の企画、運営を行った結果、学際的關係の中で、諸種の実践的能力、研究に向かう構え等を育成することができた (詳細下記)。

<学術支援活動>主旨：学術活動を企画・運営することにより、構想力、企画力、計画性等を培う。

代表的事例 学術 weeks の企画と運営：11 月を学術 weeks とし、シンポジウム、講演会等の企画と運営を行った。院生は国内外から招聘される講演者等との連絡調整やスタッフとして運営全体に携わる経験により、多様な観点に気づき研究構想を拡大させた。

年度	プログラム件数	スタッフ院生数	参加者数
平成 19 年度	1	7	60
平成 20 年度	8	48	395
平成 21 年度	12	35	518

・参加院生の声：UWA の先生方や院生たちとの交流は、(中略)新しい見解を与えてくれ、総合的な理解を深めてくれました。休憩やフィールドワークなどで交流することで、(中略)困難や悩みなどについても共有し合うことができ、元気をたくさんもらえたと思います。出典：大学院 GP2010 報告書 p11

<実践活動>主旨：院生が学内外の団体と交流・連絡して実践活動を企画・運営・参加することにより、研究フィールドへの参加と創造のための実践的諸能力を身につける。

代表的事例 オリエンテーション合宿：先輩院生が新入院生を対象に、大学院での研究生とヒューマンコミュニティ創成を目指す学問に誘う目的で 1 泊 2 日の合宿を企画・運営。学外 14 団体と連携。参加者数は平成 19 年度 175 名、20 年度 704 名、21 年度 374 名へと拡大、定着した。

参加院生は交流の幅を広げ、外部団体は院生との異種交流により、共に意欲を増加させた。

・参加院生の声：新入生が他コースの私を見て交流を図ろうとしてくれた (中略)、私にとって心の中で「よっしゃ！合宿参加してよかった！成功！有意義や！」とガッツポーズをせずにはいられないほどの嬉しさを与えてくれます。http://www.h.kobe-u.ac.jp/3017

・参加団体の声：改めてボランティア活動の幅の広さを感じ、また団体さんの熱意と想いに触れ、院生主体の運営に感心し、とても有意義な時間をすごすことができました。今回の機会を与えてくださったことに本当に感謝しています。

<大学運営活動>主旨：スタッフとして大学運営に関わり、コミュニケーション能力などの実践的諸能力を身につける。

代表的事例 ホームカミングデイ：ホームカミングデイに来られる卒業生と在学生交流プログラムの企画・運営を担当した。

・参加院生の声：たくさんの卒業生の方々とお話しすることができ、(中略)部活動の話題が出たりと大変楽しむことが出来ました。来年度は、早くから、もっと企画部分にも参加して、学生や近年の卒業生の参加を促せたらと思います。http://www.h.kobe-u.ac.jp/2431

(別紙)

現状分析における顕著な変化についての説明書(教育) 正誤表

神戸大学 人間発達環境学研究科

現状分析における顕著な変化についての説明書(教育)を独立行政法人大学評価・学位授与機構に提出(平成22年6月)後、記述に誤りが確認されたため、下記のとおり正誤表にて示す。

学部・研究科等	水準	整理番号・ 行数等	誤	正
人間発達環境学研 究科	教育	61-06- 07・上か ら2行目	大学院教育改革プログ ラム	大学院教育改革支援プロ グラム
人間発達環境学研 究科	教育	61-06- 07・表の タイトル	年度別、学術weeks件 数・参加	年度別、学術weeks件 数・参加者数等